みんみん

新年特別号2002

2001年 12月 26日 Vol. 25

特定非営利活動法人
せんだい・みやぎＮＰＯセンター　事務局通信

表紙イラスト　門間　尚子

3年、5年の節目から。

新年明けましておめでとうございます。

新世紀が明けて2年目。せんだい・みやぎＮＰＯセンターは２つの節目を迎えます。一つは、97年11月に任意団体として誕生し99年の法人化を経て５年目を。もう一つは、法人化の年に仙台市の市民活動支援施設「仙台市市民活動サポートセンター」の開館に伴い当センターが管理・運営を受託して丸３年です。設立当時から当センターの活動に賛同し支えていただいている会員の方にはどのような姿に映っているのでしょうか。

例年年末にかけて翌年度の方向性や重点事業の検討を行う理事会（合宿）にて、民設民営の市民活動支援組織としてこの５年の歩みと、これからの方向性を示すこととその意義を確認し企画の検討が進められました。そのほか2002年度の重点事業の中では、これまで２年にわたり研究・開発を進めてきた「サポート資源提供システム」の利用推進を図り、ある程度自立した事業としてのシステム展開を目指すこと、さらにそのシステム構築の成果を活用して、企業におけるＮＰＯで活躍し得る人的資源の開発・提供とその受け入れ先ＮＰＯとの連携を円滑に行うためのシステムづくりに取り組むことになりました。

また県内における地域のＮＰＯ支援センターとの協働により、地域の支援機能と連携を強化する研修とさらに個別ＮＰＯのマネジメント力強化の集中講座を実施する予定です。

当センターのスタッフ間でも互いに切磋琢磨し、持ち味を活かして仕事に励んでいきたいと思います。どうぞ今年もよろしくお願いいたします。

せんだい・みやぎＮＰＯセンター
事務局次長　青木ユカリ

内容

事務局エッセイ、理事鼎談、理事合宿報告、
感じたこと・考えたこと、ヒアリングレポート・こぼれ話集、
部会報告、みやぎＮＰＯ支援センターネットワークシンポジウム案内
東北リレートーク「コミュニティネットワークキャスト」
BOOK、事務局活動報告　ほか

●せんだい・みやぎＮＰＯセンター　理事鼎談

2002年からの戦略とは

～ 社会の課題をどう分析し解決していくか ～

当センターの大滝、加藤、針生各理事が、これまでの5年を振り返るとともに2002年以降の戦略についてさまざまな視点から議論しました。社会の動き、事業、人材づくり、ＮＰＯ間のネットワーク、企業との連携、行政との協働・・・。
今後、当センターが目指すものの姿がより鮮明に見える議論になりました。
乞う、ご期待を！

◆ここ5年の歩み

紅邑(コーディネーター)：ＮＰＯセクター全体の見とおしを踏まえつつ、当センターについてのお話をお聞かせ頂きたい。最初に、ここ5年の当センターの歩みを外側からご覧になられていて感じられたことなどをお話いただければと思う。

加藤：この５年間は、日本においてNPOという概念や考え方が定着する期間だった。世の中の急速な変化に対応しながら、それに従って組織も急速に大きくなった。世の中の動きの一歩先を読んで進んできて、いろいろなものが後から追いついてきたという印象。

大滝：95年に阪神・淡路大震災が起こり、ＮＰＯに非常に注目が集まった。しかし、それ以前から社会の中で、ＮＰＯというものが大きな意味を持ちはじめてきたという認識が、研究者やその周辺の人達の中にはあった。自治体が様々なＮＰＯ支援施策を出し、企業とＮＰＯが連携、協働して事業を起こそうという試みも増えている。当センターは、実践を持つ人が事業の企画や組織のマネジメント、それを背後で支える経理の問題や人材の問題などにきちんと着目して、組織を運営してきたことが大きい。

針生：これまで、企業経営者はＮＰＯの理念とは対極のところにあった。企業は利益を上げることが目的で、ただ事業規模を拡大するという傾向の中においては、ＮＰＯ的なことは考えてはいけない、というのが常識的だった。しかし、企業理念について学んだ時に、企業と地域が深く関わっていることを感じた。その後ＭＩＭＩＮｅｔと出会い、地域のニーズに企業のノウハウが使えるということを発見した。このような流れの中で、昨年から当センターの理事としてＮＰＯに参加し、その仕組みについて勉強している。当センターは、情報発信やドキュメントの仕組みがよくできていると関心している。これらの仕組みがよくできているということは、会員の方をはじめ、社会一般の人たちに対して当センターやＮＰＯについて理解して頂くという点で非常に有効なことである。

◆この1～2年の評価

紅邑：こうした状況を踏まえ、ここ１、２年の当センターについてどのような評価を持っているか？

大滝：１つは、行政とのパートナーシップを先導して果たしてきたこと。その中で象徴的なのが仙台市市民活動サポートセンターである。積み重ねていくうちにパートナーシップというものが一体どういうものであるのかが、少しずつ見えてきた。パートナーシップというものは当事者が互いに試行錯誤し、違いを認識した上でモノを言い合い、学び取っていく要素がないといけない。そうしたことが着実にここ１、２年で進行してきた。しかし、最近はＮＰＯが行政の下請けになり兼ねない事例が増えていることもあり、そのようにならないパートナーシップを考え、健全なモデルを仙台市市民活動サポートセンターの中でかなりの部分、実現できつつあると思う。もう１つは企業との関係。当センターとしても地域資源開発プロジェクトとして関わってきたが、それは東北の企業と地域の関わりにおいて重要な貢献が

できたと思っている。率直に言って、企業関係者がＮＰＯに対してしっかりと理解できているかどうかという点については、まだ私は非常に懐疑的で、特に東北の企業は不十分だと思う。そういう点から、この活動は幅広い企業家への啓蒙というスタンスを忘れずに活動した方が良い。行政関係者の間では多少ＮＰＯへの理解も広がってきてはいるが、企業関係者の中では、ＮＰＯはまだ「今始まった出来事」である。

◆企業経営者の視点から見えること

紅邑：企業経営者として、針生理事はどうお考えでしょうか？

針生：企業においてもパートナーシップとかコラボレーションとか、言葉で言うのは簡単だが、行動に移すと非常に「重い」。企業人は非常な競争社会の中で生きてきたがゆえに、ついつい元請と下請の関係をどうしても作りたがる傾向があり、対等に関係を見ようとしない。皆、企業人である前に社会人であり人間であるわけだから、仕事の枠の外で地域とつながりを持って生き生きと暮らしたいとか、様々な欲求がある。それが叶えられる、一歩踏み出すチャンスを与え続ける社会にしていかなくてはならない。当センターは、そのための仕組みや情報提供を行うことができる数少ない組織である。

紅邑：サポート資源提供システムは、最初に企業の方が勉強会を開き、ＮＰＯへ資源提供の仕組みを作っていくと言う部分で、モノを提供する、人を、お金を、と段階を踏んで進んできた。システムを動かすことでＮＰＯや企業との関わりが変化しつつある。

こうした認識を踏まえて、加藤理事は全国的な動きの中での当センターの位置付けをどうお考えでしょうか？

加藤：特徴的な２つの傾向がある。１つは当センターが、業界団体的な組織ではないこと。これは、従来の「協会」的な集まりでは、オープンで競争関係もあるようなNPOの状況を作り出せないと判断したため。２つ目は、個々の団体や個人への直接的なサービスを行えるように事業を展開し、独自にそのようなサービスができるように人材への投資を続けてきたこと。個々のＮＰＯ活動だけでは、個別の社会課題に対して理解を求めるのは簡単でも、ＮＰＯセクター自体の大切さはなかなか理解していただけない。それをするのが当センターの仕事である。課題としては、外からの信頼をいかにして獲得するか、ということ。これは、理事や会員の方々の信頼、行政とのパートナーシップから生まれる信頼、そしてこれまでの仕事の実績、この３つが今の企業との関係における信頼とNPOセクター全体への信頼創造につながっている。

◆これから取り組むべきこと

紅邑：今後のセンターが取り組むべきことは何か？

大滝：１つは組織が開発機能や企画、事業創造をしっかりシンクタンクとして、クロスセクターのスタンスで行うこと。状況に対して、当センターが何をどこまでやれるのかを見極めることが重要になってくるだろう。もう１つは、大学との関係。教育、研究機能もこれからは企業、NPOとネットワークを組み、それを組織化して全体をコーディネートする実力が広く問われてくる。その動きに対応できる人材をクロスセクターの取り組みをもって育てることが重要。そういった中で当センターが先進的役割を求められることは間違いなく、それに対応できる能力を身に付けることが必要。広い意味で起業を作り出す力、あることに取り組むために組織を作ってそれを運営する力は、企業だけでなくＮＰＯからも要求される。

針生：「分野の壁を超える」こと。既存の分野を一度シャッフルして、コーディネートなりオーガナイズなりしていくための人材を育てていくことが大切。

これは企業との関係だけではなくて、もっと広い意味でソーシャルアントレプレナー（社会的起業家）という視点からの人材育成が必要。企業や行政などの中で新しい価値や動きをまとめて、育て上げてゆく人材が仙台にもっと出てこないと新しい社会の動きを作り出すことは出来ない。

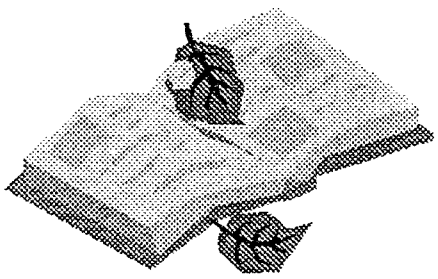
◆10年先の地域のためにできること

紅邑：今後１０年、２０年先の仙台をどうすべきかを考えたとき、ソーシャルアントレプレナーをこの時期に養成しないと、明るい未来はないと思う。ことを始めるタイミングが大切だが、私達がリードして理事や企業の人たちを巻き込んで動き出せば、閉塞感に満ちた今の時期を切り開くことができるのではないか？

加藤：サポート資源提供システムで言えば、ＰＣ１台配るにも皆が考えているほど簡単な事業ではない。それを１台では終わらせずに継続的に提供できる仕組みを整えることは大変だが、それが大切で、継続し得るシステムを作り出すことが私たちの役割。課題はその実務をどうするかで、その実務が組織の基本的なビジョンを支えることになる。その実務をこなせる組織の運営モデルとなるべく、４年間私たちは走り続け社会の基盤形成を行ってきた。今後は様々な課題の解決モデルを作り出し、社会に見せていかないといけない。そのために、ある地域、ある分野のNPO活動に焦点を絞り込み、信頼できるパートナーと組んで課題解決モデルを協働で示すことをしていきたい。現時点で確保している社会的リソースを活用して、新たなNPOとの協働に向けてシフトしていきたい。

紅邑：今後のＮＰＯの課題とせんだい・みやぎＮＰＯセンターの課題を出していただきたい。

大滝：まだ企業とＮＰＯも、行政とＮＰＯも対等なパートナーになれていないと私は思う。ＮＰＯは「下駄を履かせてもらっている」状況で、パートナーシップの相手側も薄々感じているだろう。それに、良いＮＰＯ、優秀なＮＰＯも出てくれば、今後は、当然そうでないＮＰＯも出てくる。ここしばらくが正念場と言った感じだ。それから、当センターそのものについて言えば、「新しいことは新しい器がないとできない」訳で、その意味で先ほどの「ソーシャルアントレプレナー」について言うと、おそらくそうした名前のものを育てる事業は、ここ数年で非常に増えてくる。当センターは、そうした新しい器として機能するような可能性を追求しなくてはならない。社会からは、まさにそうしたことが可能となるべき組織として期待されるだろう。社会にとって良いものを波及させていく力、小さなサクセスを増殖させていく力、そしてそれらを人に感染させていくである。」との問題提起もあった。



今後の活動計画と方針については、２００２年11月、任意団体設立より丸５年を迎えるにあたり、その記念行事開催とコンセプトブック(記念誌)作成が確認された。また、地域の活性化を生み出す「アントレプレナー(起業家)」の教育機関として、仙台市の委託事業で行った「市民起業家スクール」のような企画を継続して推進していくことや、サポート資源提供システム関連で、企業向け「ソーシャル・アントレプレナー(社会的起業家)養成」などの提案をしていくことが確認された。一方で、ＮＰＯセクターにおける人材不足をテーマに「ボランティアコーディネート等」についてもその実情や課題を調査・研究するといった提案があった。このほか、有給スタッフを20名以上抱えるまでになった当センターの組織運営についても意見交換が行われ、スタッフ間のコミュニケーションには「まじめな雑談」が必要だという針生理事のアドバイスがきらりと光った。

参加者：加藤哲夫・川村志厚・木村正樹・黒澤学・針生英一・紅邑晶子（事務局）青木ユカリ、遠藤智栄

力が大きな力になっていく。今の時期は、そうした「力」をどんどん広めていく時期だと思う。そうした力を発揮できる組織になってほしい。最近、経済学の概念で「インフルエンサー」というものがある。これは普通のリーダーではなく、変革を地域の人々に促して影響力を行使できる能力をもった、特別なリーダーのこと。ここのセンターは、そうした能力を組織として持つべきだろう。

◆いかに組織の硬直化を防ぐか

針生：社内で新しい価値を構築していくには血も流すし、労力もかかる。人がつくるものは、企業に限らず時間がたてば必ず硬直化していく。「こうしたい」という思いの部分がなくなると、途端に組織は硬直化する。絶えずそうした思いを持った状態で、新しい風を入れつつ、さらに、常に組織を「不安定」にしておくことが重要だ。トップは常に組織を不安定化すべし。ＮＰＯとはノンプロフィット、と言われているが、これからはニュープロフィット、常に新しい価値を作り出せるようにならないといけない。その中で最も重要なのは人材育成だ。それも、外に向けてソーシャルアントレプレナーを作りだすほかに、組織の内側にも育てていく必要性があると思う。育てた人が巣立っていくというのは、確かに組織にとっては辛いが、そこで再び新しい役割分担が生まれ組織の活性化にもつながる。

加藤：社会的な課題は「NPOは頼りになるか」ということ。頼りにならないＮＰＯがいるからと言って、ＮＰＯ自体が駄目だという事ではない。それぞれのＮＰＯに役割やミッションに応じた能力が備わっていれば、無闇に事業を拡張する必要はない。今までＮＰＯはそうした力を作る機会そのものに恵まれていなかった。しかし、今そうした機会が生まれつつある。企業や行政とＮＰＯを切り離して考えれば「ＮＰＯって大丈夫？」という話になるが、システム社会の中でしっかり生きていくという軸足と、システム社会には耐えられないという２つの軸足で社会を形成できる場としてNPOが必要だと言っていくことが大切。行政も企業もＮＰＯの動きにちゃんと対処すれば市民活動やＮＰＯの力は生まれていく。

また、ネットワークを組んでＮＰＯ全体の力を高めるための精神的な余裕も必要だ。当センターだけでは不可能だが、沢山の人をつなぎ合わせて社会の問題に立ち向かえば、あとはその一部分の役割は果たすことができる。今後は得意分野や専門領域の質的な向上と、オンリーワンの付加価値を高めていかなくてはならない。そうなるとそれを担える人材育成をどうするのか。社内アントレプレナーなくして、社外に作り出せる訳はないので、それを社内の人がどこまで理解できるかが鍵だろう。

◆人材としての「自立した個人」づくり

針生：「自立した個人」が参加した組織（ＮＰＯ）を作らないといけない。そういう人材が増えないと組織は活性化しない。人から聞いただけでは無理。ノウハウ、ソフト、人。この資産を将来的にどうするかを考えなくてはならない。

加藤：今年で創立５年。この１つの区切りをよい機会に、いろいろな事業の見通しや組織の見通しをわかりやすくして整理したいと思っている。

第３回　理事合宿報告
「創造的な話は、天井の高い会議室から生まれる」

去る12月23・24日、山頂に新雪をいただいた蔵王の麓「ラフォーレ蔵王」にて、第３回目の理事合宿が行われた。

通常の理事会の後、これまでの事業の振り返り、来年度以降の中長期的事業計画、本年度後期の重点事業とその方針について話し合った。

これまでの事業の振り返りでは、サポート資源提供システムの成果や市民起業家スクールの報告、東北経済産業局の調査、みやぎＮＰＯ支援センターネットワークの研修会などについて、担当理事及び事務局より報告と評価を行った。そこでは、理事合宿で、３～５年後の社会状況やＮＰＯセクターの予測をもとに当センターの事業の旗を掲げることで、それに基づいた事業が発生し、目に見える形で成果となってきたことが評価された。川村理事からは「予想以上の成果だ。今後は、ＮＰＯ業界からいかに抜きん出て、他のセクターからオファーを得られるか

■せんだい・みやぎＮＰＯセンター
とつながり、関わり

感じたこと
そして、考えたこと

●『ＮＰＯ公開コンペ２１』に寄せて

仙台青葉ライオンズクラブ
社会福祉委員長　遊佐　美由紀さん

仙台青葉ライオンズクラブでは、２１世紀を迎えNPO・市民活動はますます重要性を増していることから、企業における新たな社会貢献活動としてNPO公開コンペ（NPO活動助成事業）を企画実施しました。

コンペでは、『男女共同参画』・『人権』・『子ども』の分野のNPO・市民活動団体を公募、13団体の応募がありコンペ当日は１２団体が参加しました。５分間の活動アピールを行い、審査の結果、子ども・『フリースクール西の平』、人権・『子ども虐待防止ネットワークみやぎ』男女共同参画・『リプロネットみやぎ』に活動助成金各１０万円を贈呈しました。

企業の経営者であるメンバーは「NPOは、きめ細かいサービスについて地道な活動をしていることが分かり有意義な時間だった。これからも是非続けて行きたい」と話していました。

初めての企画実施にあたり、せんだい・みやぎNPOセンターから応募要項、審査基準などのアドバイスをはじめ多大なご協力を頂き、心から感謝いたします。なお、活動助成を受けた３団体は、同センターの「NPO情報ライブラリー」に登録し、今後の活動の成果等を報告して頂くことになりました。

当クラブでは来年も継続してコンペを実施し、各ライオンズクラブにおいてもNPOとの交流と理解を深め支援の輪が広がるよう働きかけてゆきたいと思っています。

●ボランティアをして感じたこと

東北大学法学部3年　細野　泰志さん

ボランティアを始めてもう１年以上になります。始めたきっかけは自宅の往復という単調な生活に変化を加えたいと思ったからです。そして、どうせやるなら学生があまりやらないことをしてみようと思い、NPOでのボランティアを選びました。しかし、NPOについてはボランティアを始めるまで殆ど知りませんでした。「百聞は一見に如かず」という諺の通り、現場で経験することで初めてその内容が分かってきました。今では、NPOとは行政に代わってより木目細やかな、いわば「痒いところに手が届く」ような公的サービスを提供する団体だと認識しています。

現在、政府はいわゆる「小さな政府」に向かっています。そして日本では社会の成熟化とも相俟って、民間が果たすべき役割が徐々に大きくなってきています。その中で国民はこれまでの行政に依存にした体質を改めて自己責任に基づいて生活を成り立たせなくてはならなくなります。そのような変化の中でこれまでの行政が担ってきた役割をこれから担うのがNPOであると私は考えます。

●センダードサロンの魅力

アトリエ　ソキウス　今野　従子さん

今年度は半分も出席できなかったが、せんだい・みやぎNPOセンターが主催するセンダードサロンは、いつも「出たい！」と思っている企画である。色んな立場の人が、昼間の仕事場を離れて自主的に集う場で話される言葉はとても心に響く。精神障害者の地域生活を支援するという、あまり一般の人が身近な問題として捉える機会は少ないであろう活動をしている当団体にとっては、お互いの活動を知ろうとする人ばかり集まるセンダードサロンは魅力的である。自分の活動とは異なる活動をしている人に向かって話すのは、難しい。しかし、こういう時の方が話していて「伝えなきゃ」と使命感のようなものが湧いてくる。きっとこの誰にでも解る言葉で伝えられることこそ、私たちの活動で一番必要なことなのだろう。この絶好の機会が、センダードサロンにはある。今後とも出来る限り、顔を出したいと思っている。

●ＮＰＯに期待する

東北経済連合会　秋田　靖博さん

現在の日本は、20世紀型工業社会がもたらした大量生産、大量消費という時代から、循環型社会、ゼロエミッションを求める社会へと変化しています。また、戦後の社会経済システムを支えてきた中央集権体制も制度疲労を起こしており、「中央から地方へ」「官から民へ」という時代の潮流変化が生じており、地域経営も大きく変わろうとしております。

これまでは自治体が地域経営の主な担い手でありましたが、今後は、住民・NPO・企業・自治体等の多様な主体が役割を果たしながら、責任あるイコールパートナーとして、自立的・主体的な地域づくりに参加することが重要であります。特に、地域内の問題解決や生活者の視点からNPOが果たしていく役割は大きいと思います。このようなNPOの諸活動をサポートする「当センター」の役割がますます重要になります。尚一層の御活躍を期待いたします。

●ＮＰＯセンターへ感謝

イートス（株）　増子　良一さん

明けましておめでとうございます。
皆様にとりまして、良き年になります様、ご祈念申し上げます。さて私がＮＰＯセンターと関わりが出来ましたのは2年位前の事です。私は30数年コンピューター業界に身を置いており、環境破壊を行っている側の人間です。環境問題が取り沙汰されている中、何か自分にも出来る事はないかなと考えている時に加藤さんと知り合う事が出来ました。加藤さんのお話をお聞きし、自分も参加してみようと思う様になり「サポート資源開発プロジェクト」に籍を置く事になりました。その後の皆様との熱い語り合い、沢山の人々の協力をいただき問題を解決し、10月からパソコン提供システムが稼動した時は感激でした。自分の思いも少し叶ったと協力いただきました皆様に感謝です。

今年も又、NPOセンターの皆様のあの活気と熱き思いの「パワー」をいただき、世の中の為になることが少しでも出来たらいいなと思い活動して行きたいと思っております。

●１年間を振り返って

宮城労働金庫　北　尚登さん

2000年9月某日。兼ねてより、某所轄官庁へ許認可申請していた「ＮＰＯ事業サポートローン」について、いよいよＧＯサインが出そうだという情勢のもと、全国の各県労働金庫担当者が東京へ招集される事となりました。会議に臨むに当たり、当該事業の制度化及び運営については、各地域のＮＰＯ支援センターとのネットワークが前提となる事から、未だ構築していない金庫は、必ず挨拶に伺い、今後の協力関係を要請してくる事を指示されていました。

それまでの宮城労働金庫は、「せんだい・みやぎＮＰＯセンター」からのラブコールにも消極的対応であった事は否めませんでした。早速、前任者と私は、加藤さんと紅邑さんにお会いし、今後の労働金庫としての社会貢献活動に対する考え方等を説明すると伴に、適宜センターとしての指導や助言を戴きたい旨のお願いを致しました。

「せんだい・みやぎＮＰＯセンター」では、全国的に有名な「サポート資源提供システム」の運用に向けた準備作業中であり、宮城労働金庫も企業として参加してはどうかと勧められました。一応は金融機関の端くれと言う事で、第３ワーキングの「資金・基金」グループに編入させて頂きました。その後は、金庫の代表として、例会に参加していた訳ですが、それはあくまで業務の一環としてのものであり、私個人としては、何もしていない事に対するジレンマを感じていました。

有る日、『大年賀』という加藤氏が執筆なされたコラムを読ませて頂きました。日本古来からの「むら社会」的慣習が及ぼす影響について、これまでの官僚的行政手法の限界について、そして、これからの地域社会作りにはＮＰＯとの協働が不可欠であること等が、解り易い言葉で記載されており、深い感銘と共感を覚えました。

ＮＰＯ業界に関しては、やたら横文字が氾濫し、法的な専門知識が出て来たりで、まだまだ勉強不足を痛感している私ですが、最近は、企業の代表だの、個人としての参画の有り様だの、余り小難しく考えずに、肩の力を抜いて気軽に関わっていければ良いなと考えています。

●経済産業省調査・ヒアリングレポート●

●ちょっと小耳に！こぼれ話集●

■田口トモロヲのナレーションが欲しかったNPO版プロジェクトX的ヒアリング

「スキー場を残すためにNPOの勉強をするという状況だった。NPOを理解していくうちに、不忘山の恵みを知ることになり、地域の資源(理事や会員という人材も含む)に気づいて、今はそれを活用できるようになった」「POであれ、NPOであれサービス内容に変わりはないけれど、NPOで運営するようになって、応援してくれる白石市民の声をスキー場の従業員が聞く機会が増えた」

最後の紅葉に夕日がきれいに差し込むなか、蔵王山麓の[不忘アザレア]が経営している白石スキー場へ向かう道すがら、さっき聴いた事務局の吉田さん、川村さん、木村さんたちの話が甦ってきた。少しも誇張されていない、ありのままの活動の歩みについて話していただいた模様に、あの[プロジェクトX]のナレーションが入ってきても、少しも不思議ではないドラマがあった。

その後、いくつかのNPOの現場に足を運んで、その団体の活動やその人がその団体とどんな事がきっかけで関わることになったのか伺った。そのたび、それぞれの[プロジェクトX]的話を聞いた。失敗も、成功もある。それでも活動しつづけた理由とは。わけもなくその人を突き動かしたものとは。聴くほど、どの人もとってもカッコよくなっていった。それだけでとても幸せな気持ちになった。　(紅邑　晶子)

■やっぱ情熱でしょ！

今回のヒアリング調査の対象は、地域に根ざした活動・事業を展開する主体、ということで、一般には、ＮＰＯとかコミュニティビジネスという言葉で言われることが多い。一口でこう呼ぶのは簡単だが、実際にはとても多様なものなのだ、というのが、調査を進める中で強く感じていることである。

スタッフと一口で言っても、ボランティアが基本で活動している団体から、専従職員を数多く抱える団体まで。予算規模で見ても、数十万円規模の団体から、億を大きく超える団体まで。団体の理念や、活動・事業の内容、その対象といったものは、無論団体それぞれである。ヒアリング先の資料を目の前にならべて、「本当に、１つの枠でくくって考えてもいいのだろうか？？」と頭を抱えてしまうほどだ。

ただそんな中で、どの団体にも共通しているのが、ヒアリングに応じてくださった方々の熱い情熱である。ほとばしる情熱、秘めた情熱、いろいろあるが、とにかくアツイのである。行った先々、圧倒されっぱなし、というのが正直な所である。

そのような情熱をホットのままでお伝えすることができるかどうか、これからが当センターの腕の見せどころである。責任重大だ。

やっぱ情熱でしょ。　(高田　篤)

■コミュニティビジネス的道の駅に関する一考察

私は普段から「産直市」や「道の駅」に立ち寄りその土地の暮らしや食べ物などに出会ったりするのが大好きだが、今回のヒアリングでもこの機会に恵まれた。

特に感激したのは遠野市にある道の駅「風の丘」だ。ヒアリングをお願いした「企業組合夢咲き茶屋」の店舗がある場所でもある。

食堂、産直市、店舗など各駅共通の店舗はもちろんのだが、なんと言っても情報コーナーの充実度は抜群だ。道の情報は当たり前、市内、周辺地区のグリーンツーリズムや地域情報などがきめ細かく提供されており、「ごちゃっ」と展示されているのがまたイイ。市民に開放されているギャラリーは３月くらいまで予約済みとのことだし、広い無料休憩室は一番眺めがいい日当たりのいい場所に配置してあることも素晴らしい。広いテラスからは遠野の山々、桜並木(春は素晴らしいとのこと)が眼下に一望できる。１～２月には「鍋なべサミット」もあるとのこと。ぜひ、皆さんも出かけてみては。

(遠藤　智宋)

部会報告

■センダードサロン報告■ 第59回　第60回

第59回のサロンは、「まだまだ現役！定年後の楽しい市民活動」と題し、11/8に行われました。定年後が「第2の人生」という言葉通り、いや、市民活動が「第1の人生」と思うほど、いきいきと自分たちの活動を話していた皆さん。「パソコンの技術を新たに身につけることができた」「濡れ落ち葉にならずに済んだ（!?）」など、それぞれが活動に楽しみとやりがいを見出していました。ただし、活動に積極的すぎて「定年前よりも忙しいんじゃないの？」という家族からの意見もあり…。これからも、そのパワーと人生経験を活かして、バリバリと（ほどほどに？）活動してほしいと思いました。

第60回は、12/18に行われた「国境なき多文化交流年末トーク2001」でした。2001年は国境や文化の違いがきっかけとなった悲しい事件が起こった年でもありました。そんな1年の締めくくりとして、仙台在住の留学生の方々や、多文化交流に関心のある方があつまり、国境を越えるとはどういうことか、また自分の異文化体験などを中心に会話がはずみました。天候、食べ物、言葉など、自分達の所属する環境との違いを「新鮮」ととらえ、自分の経験として貴重な財産にしている皆さんのお話で楽しいひと時になりました。

（田中　聡子、中務　恵美）

●次回　1/23(水)19時から/テーマ「新年会2002！ネットワークで新たな力を生み出そう」
会場・仙台市市民活動サポートセンター

■PONPO−NET■ 12/13

12/13の前半は、“議員の仕事と市民活動”と題して、仙台市議会議員の岡本あき子さんと宮城県議会議員の遊佐美由紀さんをゲストに迎え、お話をうかがいました。岡本さんからは、普段の議員の仕事について説明していただきました。また、市民活動団体が自分たちの主張を議会に取り上げてもらえることが可能な“請願”という方法を紹介していただきました。遊佐さんからは、議員になったきっかけや女性議員ならではの取り組み、議員立法で条例をつくった話などをしていただきました。参加者からは「何をしているかよくわからなかった議員の仕事を知ることができた」「今までもっていた議員のイメージが変わった」などの感想があり、普段あまり聞くことのない議員の話を聞く、貴重な機会となりました。

後半は、今年のPONPOを振りかえった成果と来年へ向けた課題を出し合いました。成果としては「多様な人が集まったこと」、課題としては「会のビジョン・メリットを示すこと」「もっと深い議論をしたい」など多くの意見が出されました。次回2月4日には、今回出た課題をもとに、さらに充実した会にすべく、参加者みんなで考えていくことになっています。　（中津　涼子）

●次回　2/4(月)
東北NSソリューションズ（株）会議室にて

みやぎ支援センターネットワーク　シンポジウム　2/1(金)開催！

日本財団からの助成を受け、県内5ヵ所の支援センター連携の場として立ち上がった「みやぎNPO支援センターネットワーク」。全国の支援センターから講師をお招きし、これまでに石巻、白石、気仙沼、古川の各地で組織マネジメントの研修を実施。それと同時に、各支援センターが生み出してきた成果と、それぞれの地域性を反映した課題を共有してきました。全国的に見ても、こうした「地域密着型」支援センターの連携事例はまだ前例がなく、特に宮城県の場合は、それらの支援センターが全て「民設民営」というスタイルで生み出されたことに大きな特徴が見られます。「市民の手で、市民の活動を支えてゆくには一体何が必要なのだろうか？」そんな問いかけをテーマとしながら、その解決に向け、各講座ごとに講師と出席者の間で真剣な議論を積み重ねてきました。

そして、その活動の集大成として、2月1日午後1時30分より仙台市市民活動サポートセンターにて公開シンポジウムを開催いたします！これからの時代、「民設民営」の支援センターは、地域の中でどのような役割を果たし、どのような社会を切り拓いていくのか。「地方分権時代」の胎動の中で、ますますその重要性を増している中間支援組織の明日を考えます。

宮城の未来は、このシンポジウムから。みなさん是非ご参加下さい！

（工藤　寛之）

東北リレートーク

青森県　弘前市
コミュニティネットワーク キャスト

“お城とさくらとりんごのまち　弘前”のNPOコミュニティネットワークCASTです。

CASTは、英語で「配役」の意味です。CASTに参加していただき自分の役割を自分で見つけて欲しいとの思いから名づけました。CASTのCはキャッスル、Aはアップル、Sはちょっと苦しいのですが桜、Tはタウンつまり“お城とさくらとりんごのまち　弘前”をイメージしました。また、CASTには一石を投じるという意味もあり、「CAST」の活動が何らかの形で社会貢献へのきっかけなればという意味も込められています。

現在、会員は250名を越え、CASTの事務所も若い方の声が絶えないほどです。CASTは、地域の情報を集め、コミュニティFM（アップルウェーブ）の番組づくりを通じて、まちづくり活動の支援や地域コミュニティ活性化の支援をしていこうという全国では初めてのNPOです。

2年目を迎える今年は、多くの市民の皆さんが参画できる番組・地域に密着した番組作りを通じ、まちづくりの支援やボランティア活動グループ（特に同じNPO）の支援ができればと思います。またCASTの目的を達成していくためにも、市民の力を結集して広く活動していきたいと考えています。

弘前にお越しの際は是非CASTにお立ち寄り下さい。　（理事長　波多野　厚緑）

■ NPO法人 コミュニティネットワーク キャスト ■
弘前市土手町38　したどてスカイパーク2階
Tel 0172-38-4040・Fax 0172-38-4050

BOOK

近くの山の木で家をつくる運動宣言

発行：特定非営利活動法人緑の列島ネットワーク
発売：（社）農山漁村文化協会（農文協）
定価：1000円（本体952円）

家をつくるのに何故木にこだわるのか、何故外国産ではなく日本産の木材なのか、何故他県の銘柄材ではなく地元産の木材に注目するのか等々、この活動に至った理由を多角的に分かり易くといている。また、日本を中心に地球上の美しい写真や各界からのエッセイが織りこまれているのも魅力である。

国土の70％が森林で木材自給率が100％近かった日本がここ30数年で諸外国で地球規模の環境破壊をするに至った経緯を読んでいると、“近くの山の木で家をたてる”という行為は、日本固有の林業・文化・生活ひいては価値観までに通じることと知った。内よりも外、性能（中身・特色）より外見（利潤等）を重視する傾向が日本全土を覆っている様に思う。日本と同じ様に自給率が下がったイギリスは、性能重視という価値観の変換から林業の再生をとげた。何十年とかけて成長する木を育て、日本の急峻な山での林業の方法や伐採した木の個性をいかした使い方の話は、子育て等の人間育て・人格の成長と共通すると感じた。環境破壊を含む経済等社会の様々な問題は連鎖しており、そこでは人間の価値観や人格に大きく影響されているのではないだろうか。

川上（山）の木の生産者と川下（町）の工務店や消費者との共同作業の必要性と過去の取り組みの事例・問題点・今後のあり方への提言や25周年を超えた「草刈十字軍」等のボランティアとの連帯については、地域のNPO活動にも参考になるものであった。「お互いの顔が見える関係」がキーワードである。

「本物の木の家に住みたい」という人が増えているという。21世紀は循環型社会への転換が余儀なくされている。この価値観の変換の時にひとりひとりが未来について再考するにあたっても、お薦めの1冊である。

（佐藤　友里）

事務局活動報告（10/5～12/20）

活動報告

■事務局/自主事業関連

・第２回評議員会（10/9）
・理事会（第29回：11/23・24　第30回：12/20）
・仙台市市民活動サポートセンター全体ミーティング（10/10・17・24・31・11/7・14・21・28・12/7・14・19）
・事業・運営会議（第23回：10/10　第24回10/26　第25回：11/6　第26回：11/20　第27回：12/6　第28回：12/18）
・センター会議（10/31）
・ＮＰＯ税制学習会（10/13　黒澤・紅邑・高田・青木・高橋・中津・遊佐）
・センダードサロン「せんだいコミュニティビジネス最前線」／「まだまだ現役！定年後の楽しい市民活動」／「国境なき多文化交流年末トーク」（10/16・11/15・12/18　紅邑・遠藤・田中・中務）
・ＰＯＮＰＯ－ＮＥＴ「華麗なるタイ料理と環境のタベ」／「議員の仕事」（10/24・12/13　紅邑・中津・松尾）
・経営相談（10/26・11/13・12/14　加藤）
・サポート資源提供システム公開シンポジウム（10/27）／第４回研究会（11/22　加藤・紅邑・高田・青木）
・宮城県議会との意見交換会（12/15紅邑・黒澤・高田）
・スタッフ面談（12/11・12・14・17）

■ＮＰＯ/企業関連

・ボランティアパワーアップ養成講座／主催：みやぎボランティア総合センター（10/5・15・11/2・12 加藤・紅邑）
・評価システム研究会例会（10/16・11/13・12/9　加藤・紅邑）／シンポジウム（12/8　加藤・紅邑・青木・遠藤・須藤）
・第３回講座<気仙沼編>（10/19・20　加藤・紅邑・青木・工藤）／第4回講座<古川編>（12/1・2　加藤・紅邑・青木・工藤）／主催：みやぎＮＰＯ支援センターネットワーク
・ＮＰＯマネジメントパワーアップセミナー<東海編>／主催：（財）住友生命社会福祉事業団・日本ＮＰＯセンター（10/20　加藤）
・仙台青葉ライオンズクラブ講演（11/1　紅邑）／セレモニー（11/25　紅邑・高田）
・「まちづくり組織をデザインする」／主催：まちづくりシンポジウムin長岡2001実行委員会（11/4　加藤）
・富士総合研究所委員会（11/5　加藤）
・日本財団「多文化セミナリオ東海」成果発表会／主催：日本財団（11/9　加藤）
・シンポジウム「高年齢社会における世代を超えた「社会参画の場づくり」とその課題／主催：（財）高齢者雇用開発協会（11/10　加藤）
・一新塾講座（12/13　加藤）
・NPO支援センタースタッフ研修<福岡>／主催：日本ＮＰＯセンター・ＮＰＯふくおか（12/14・15　青木・遠藤）
・第2回デジタルコミュニティスクール市民/社会人向け遠隔授業編成委員会／主催：ＤＣｓ地域情報化推進センター（12/19　加藤）

■自治体関連

・環境学習ステップアップセミナー／主催：仙台市・環境計画課（10/6・12/1・15　加藤、遠藤、高橋）
・ボランティア講座／主催：いわき市（10/6　加藤）
・市民起業家スクール/主催：仙台市・市民局（10/9・11・16・23・25・30・11/1・6・8　加藤・紅邑・遠藤智・渋谷・門間・遠藤孝）
・延岡市市民福祉セミナー／主催：(財)延岡市高齢者福祉協会（10/12　加藤）
・ＮＰＯマネージメント講座／主催：宮崎県（10/13加藤）
・住民協働ワークショップ／主催：（財）ふくしま自治研修センター（10/17・11/7・20・12/5・12　加藤）
・中濃地区コミュニティ研修会＆ＮＰＯセミナー／主催：岐阜県／企画・運営：ぎふＮＰＯセンター（10/21　加藤）
・第7回東北六県行政課題研修／主催：（財）東北自治研修所（10/23・24　加藤）
・クリーン仙台推進員研修（11/1・26・12/17　加藤）
・ＮＰＯマネジメント実践講座<福島>／主催：福島県（11/2・3　加藤・青木・田中）
・アレマ会議／主催：仙台市・廃棄物管理課（11/12　加藤・紅邑）
・経済産業局調査ワーキンググループ／委員会（11/19・21）
・第2回集落構想作成方針検討研修会／主催：宮城県土地改良事業団体連合会（11/27・28・29・12/4　加藤）
・仙台市社会教育委員会（11/28　紅邑）
・仙台まち美化ネットワーク世話人会（12/18加藤・紅邑）
・仙台市市民公益活動促進委員会（12/19　紅邑）
・（社福）仙台市社会福祉協議会第2回評議員会（12/19　紅邑）
・宮城県民間非営利活動促進委員会（12/20　紅邑）

■相談、ヒアリング関連

・ロビン・ローランドさん来訪（12/8・9　加藤・紅邑）
・ヒアリング：（株）ヒューマンルネッサンス研究所（11/26　紅邑・高田）
・取材：毎日新聞社　野口さん来訪（12/6　紅邑）
・ヒアリング：成蹊大学　高田さん、飯塚さん来訪（12/7　高田）
・取材：環境新聞社　後藤さん来訪（12/12　青木）

■スタッフ紹介
9月から臨時職員として活躍中です。

● **門間尚子**　精神年齢１４歳、見た目４０歳、体内年齢６２歳・・その実体は？！●生粋の仙台人●趣味/読書！温泉（やっぱ露天風呂でしょ！）と食べ歩き（食い倒れ貧乏）とアートが大好き！●特技/雪にダイビングして人拓取りをしたこと！顔の凹凸まではっきり・くっきり取れました。雪上に寝っころがって青空を眺めると、心がぱーっと無限に広がるよーで気持ち良かったです。勿論、かまくらと雪だるまもしっかり作りました。● 目指すもの/次の世代に沢山の選択肢を残すこと。抽象的ですが、いろんな生き方を自分の意思で自由に選べる世の中になるように、個人レベルから頑張ります！！

サポート・ご協力 ありがとうございます

●平成13年度会員 （五十音順、敬称略、10/5～12/20）
(新規)くりこま高原自然学校、起業支援ネット、北尚登、岸田清実、木村修、東北マンション管理組合連合会、都市環境標識協会宮城支部
(継続・個人・正会員)氏家清一、木村孝、昆野武裕、古川隆、遊佐さゆり
(継続・団体・正会員)杜の伝言板ゆるる、
(継続・準会員)須藤達也、宮城県アメリカンフットボール協会
●ボランティアスタッフ（五十音順、敬称略）
(事務局)細野泰志、本郷正武
●企業・団体協力（五十音順、敬称略） 岡元タイル(事務局スペースを社会貢献価格にて)、東北ＮＳソリューションズ(ＰＯＮＰＯ-ＮＥＴの会議室を無料提供)、富士ゼロックス(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

催事案内

■センダードサロン
テーマ「新年会2002
ネットワークで新たな力を生み出そう！」
日時：1/23(水)19時～
参加費：500円+一品(飲み物または食べ物)
会場：仙台市市民活動サポートセンター
主催：せんだい・みやぎＮＰＯセンター

■ＮＰＯ経営相談
1/24(木)、2/18(月)、3/26(火) ※13～17時、予約制
相談料：1時間2500円(会員500円引き)
アドバイザー 加藤 哲夫
主催：せんだい・みやぎＮＰＯセンター

■国際シンポジウム
「ＮＰＯと評価-ＮＰＯマネジメントの実際」
日時：2/24(日) 13時～17時
会場：東京ボランティア・市民活動センター(東京都)
参加費：3000円 主催：評価システム研究会
申し込み：評価システム研究会 TEL 042-359-8605

せんだい・みやぎＮＰＯセンター
〒980-0804 仙台市青葉区大町2-6-27 岡元ビル4F
tel 022-264-1281 fax 022-264-1209
E-mail minmin@minmin.org
http://www.minmin.org/
★メールアドレス、ＨＰが変わりました！

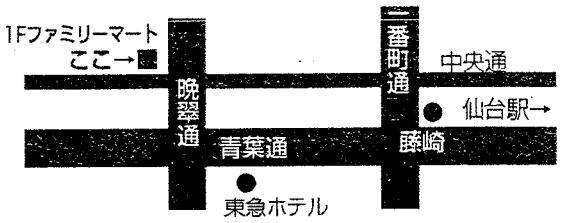
会員の方へ

■情報ライブラリー開設！！
当センターでは、ＮＰＯ・市民活動団体の皆さんから活動に関する情報をお預かりし、企業や社会に広く公開・発信します。企業や市民と一層連携を図り活動を広げましょう。お問い合わせ下さい。

■サポート資源提供システム 登録団体募集中
あなたの団体もシステムに登録して、PCや書庫などの提供を受けてみませんか。企業とつながるきっかけにもなります。お問い合わせください。
・中古PC40台提供中 応募締め切り 1/15(火)
ＭＩＳＡ様からのご提供です。

◆年末年始のお休みのご案内◆
2001年12月29日(土)～
2002年1月6日(日)まで
皆さま、よいお年をお迎えください。

■岡元ビル4F 仙台駅から徒歩15～20分



みんみん編集後記

■「インターネット・フォークロア」から、「世界がもし100人の村だったら」という本が誕生した。世界の丸ごとをこういう視点で見ることが、今の私たちには必要だ。(紅邑)
■新しい世紀の始まりは、あまりにも多くの戦火に包まれたように思えます。しかし、その一方で、仙台の街角には新しいＮＰＯの「息吹き」がたくさん生まれつつあのも確かなこと。地域の希望が、世界の絶望に立ち向かえる方法は？？その答えが、ＮＰＯだと信じたいものです。(工藤) ■今回のみんみんは皆さんに読んで欲しい一心でビッグな付録を付けました。おかげで年末の体力を使い切った気分です。皆さん、よい正月休みを過ごしましょう！！(遠藤) ■ＮＰＯにハマったこの１年。締めで『みんみん』の編集にハマれて本望です。日々進化するＮＰＯについて行くべく、しっかり充電して新年を迎えたいと思います。お疲れ様でした！！(門間) **●2002年は、まずセンダードの新年会で会いましょう！**